

エンド・オブ・ライフを支える看護師と家族の役割について

～家族支援の大切さを感じた一事例～

はじめに

今、国の政策は「病院から在宅へ」と推進されている。私たち訪問看護師は、ターミナルを迎える療養者に対し「その人らしい最期」を支えるためには何が必要なのか日々考え、ケアを行っている。その中で、療養者を支える家族への支援も重要なケアであり、家族の意志が最終的に療養者の看取りの場を大きく左右すると考える。今回、妻に先立たれ独居生活となった A 氏の終末期を支えるにあたり、キーパーソンである養女が「自宅で過ごさせたい。」と話していたが、養女は自分の生活を第一優先と考え、A 氏の介護に非協力的であった。そんな養女の行動に訪問看護師は戸惑いや、ジレンマを感じた。この事例を通して、エンド・オブ・ライフを支える家族の意思決定支援の大切さを改めて感じたことについて報告する。

事例紹介

A 氏 男性 100 歳 ウロストーマ造設中。A 氏には実子はおらず、

妻の妹の子を養女としている。養女は A 氏の介護に殆ど介入せず。妻亡き後、キーパーソンが養女に変更となったにもかかわらず、A 氏の生活スタイルは同様に訪問看護師とヘルパーを利用しながら独居生活を続けていた。A 氏は加齢に伴う筋力低下により転倒を繰り返し一時的に入院となったが退院後は、さらに認知機能も悪化し必然的に養女の協力が必要となった。

※ 倫理的配慮 対象者には研究の趣旨について説明し同意を得た。

他職種で得た情報については厳重に管理した。

経過

パウチ交換や清拭等のケアへの拒否や、転倒が頻回になり独居生活の継続は徐々に困難となる A 氏の今後について養女も含めた担当者会議を実施。A 氏がターミナル期であることや、孤独死の可能性も説明し養女に介護への協力を求めた。養女はこのまま在宅での生活を継続してほしいと希望したが、養女自身の生活もある為、同居や長居はできず、徐々に衰弱する A 氏に関わるのが怖いと言い、訪問看護師、ヘルパーでサポートしてほしいと要望した。A 氏の生活を支えるにあたり、家族としての関わりや、養女に後悔をさせないためにケ

アへの参加を何度も呼びかけたが、養女の考えは変わらなかった。看護師は戸惑いを感じながら A 氏が一人で生活する時間を少なくするために看護師やヘルパーの訪問回数をケアマネと相談し不安を与えない様ケアを行った。当初から A 氏は「ここにいたい。入院はしたくない。」と話していたことがあり、養女はその意思を尊重し「自宅で過ごさせてあげたい。」と口にはしていたが、徐々に衰弱し自宅にいることすらわからなくなっていく A 氏を見て、最後は施設での看取りを希望した。希望通り施設への入所は出来たものの、入所後まもなく呼吸状態が悪化し施設内で他界した。養女は A 氏の最期を施設で看取ることが出来た。

考察

自宅で最期を迎えたい療養者の中には、病気の進行や老衰により本人の自己決定能力が著しく低下し、代わりに家族が主となって決定することが多い。今回の事例に関して、A 氏は自己決定できる状態ではなかったためキーパーソンである養女の最終判断で施設への入所になった。A 氏が話した「ここにいたい。入院したくない。」という気持ちに養女も最期まで応えてくれるだろうと思っていた。しかし、家

族としての意思決定も乏しく、A 氏と距離を置く養女の態度に私たちはズレを感じ「現状認識が出来ていない家族。」として捉えてしまった。家族が示す言動の先には家族としての価値観や家族の様々な事情が影響しているため、それらを把握していかなければ、支援の方向性を見出す事ができない。「家族とはこういうものだ。」という訪問看護師の経験や価値観を家族に押し付けず、どのような選択だったとしても、その選択を支持しなければならない。また、家族がその選択を後悔しない様、終末期を迎える療養者とその生活を支える家族を支援していく事が訪問看護師として重要であると感じた。

終わりに

初めて在宅介護を行う家族にとって不安や負担は大きい。一度何か決断した後でも、迷いや不安が生じる事は日常的にあり得る。苦悩する家族の心情に配慮し、家族の意思を何度も確認、対話を繰り返すことが重要である。より良いエンド・オブ・ライフを実現させるには、家族に複数の選択肢と療養者に残された時間をどう過ごしていくか家族の意思決定を尊重できる支援をしていきたい。